

小諸不登校・登校拒否・ひきこもりに学ぶ親の会



はじめのいっぽ

不登校の子どもたちにとって
何よりも大切なのは
学校に行こうと思っても行けない自分を
あるがままの姿で
受け止めてくれる人の存在です
詩画集「子どもは紫の露草」 広木克行著より

苦しみを解決してくれる
魔法の言葉は
どこを探してもありません
我が子の苦しみの意味を理解しようと
親同士で学び合う以外に
子どもの心に
穏やかさを取り戻す方法はないのです
詩画集「子どもは紫の露草」広木克行著より

親の会 開催日時 毎月第3日曜日
13:30 ~ 17:00
(8月は『全国のつどい』に参加するのでお休み)

場所: 小諸市民交流センター 会議室

会費: 1回目のみ参加 200円(資料代) 年会費2,000円

連絡先: 小山 知徳・優子 Tel 0267-24-2380

2005年12月に親の会が、発足。初回参加者は8名。会を重ねるごとに参加者も増え、多いときには、20名を超える日も生まれました。「長崎:親の会通信」「不登校を考える東葛の会『ひだまり』ニュース」の読み合わせを通して学び合い、それぞれの悩み、苦しみの声をわが身に引きよせて聴き合い、子どもたち・青年たちの苦しみの意味を理解しようと、手さぐりで学び合ってきました。『生き、語り、語り直し、生き直す』道をいっしょにみんなで探しませんか。

つながる

ひとりぼっちで悩まないで

★ 同じ立場にある親たちがつどって、つながって『しゃべって聴いて、聴いてしゃべって自分に気づく』『自分は自分であってほしい』『自分への自己肯定感をいっしょにみんなで育て合いませんか』★

学ぶ

子ども・青年の心に寄り添うために

★ 子どもたち・青年たちは、さまざまなサイン・シグナルを送っています。子どもの心に寄り添い、子どもたちの必死な思いを受け止めるために、いっしょにみんなで学び合いませんか ★

発信する

子ども・青年・不登校・自分理解を深めるために

★ 年に1回の講演会は、大きな学びの機会です。『学ぶ』ことで『気づく』ことがあります。出会いの中で『気づきのアンテナ』をゆっくり自分なりのペースで、いっしょにみんなで育て合いませんか ★



誰もが自分らしく生きることをめざしてつながりあう ネットワーク

紫露草という草は、放射線に触れると変色すると聞きました。住民の意志に反して原子力発電所が作られた地域では、そこに住む人々が自分の家の庭先に紫露草を植えているといいます。人間には感じとれない放射線の危険を、その草の変色によって察知する自衛のための知恵なのだそうです。

この話を聞いたとき「子どもたちもまるで紫露草のようだ」と私は思いました。子どもたちは、社会や学校あるいは家庭の中で感じる不安や危険を感覚の鈍った大人たちに代わって、さまざまな症状や行動で示してくれる存在だからです。

でも子どもの存在が紫露草のようなものだと考える人は、あまり多くないというのが私の実感です。症状を見れば病気だと思い、行動を見れば「おかしな子」「弱い子」と思い、それ以上は考えようとしなない人がほとんどだと言ったら言い過ぎでしょうか。

先日、「登校拒否を考える親の会」の月1回の勉強会に、数ヶ月間通い続けた一人のお母さんが意を決して私の研究室を訪ねてくれました。そして彼女はこう言いました。

『親が苦しいとき、子どもはその十倍も百倍も苦しんでいる』という先生の言葉を聞いてハッとしました。

自分の苦しみを何とかしてもらいたいと思っていた自分に気づいて、それから、いつもこの言葉を思い出して暴れる息子(16歳)の気持ちを考えるようになったんです」と。

長い苦しみを経てはじめて、彼女は息子さんの家庭内での暴言や暴力を、不安や危険を感じとった心のシグナルとして理解するようになったのです。

詩画集『子どもは紫の露草』 広木克行著 (神戸大学名誉教授 臨床教育学)

2002年1月24日 初版発行「はじめに」より



子どもの心を深く理解したいと思うならば
愛を糧とする自分の心の成長を振り返り
子どもを尊ぶ精神を学び
子どもたちがおかれた現在の状況を
曇りなく見つめることが不可欠です

お父さんとお母さんは
こんな夢を持って生きてきた
その夢を君にバトンタッチしたいから
だから生きてほしいんだよ

子どもが苦しみながらも
どのような道を探りあてるのを
子どもを信じて待ち続けよう
そんな気持ちになってはじめて
母親と父親は
子どもの最良の伴奏者に
なることができます

子育てに失敗した親と
失敗しなかった親とに
分けることは不可能です
失敗のない子育てなど
あり得ないし
子育てというのは
失敗の連続だからです

学力は
本人が学ぼうと思った時に
また取り戻すことができるものです
これは教育学の真実です
そして教育の中で何より重要なことは
人間としての力をつぶさないということです

